

MJ

Nikkei
Marketing
Journal

日経流通新聞

6月29日(水曜日)

月/水/金 発行

発行所 日本経済新聞社

東京本社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
電話(代表) (03) 3270-0251

大阪本社 〒540-8588 大阪府中央区大手前1-1-1
電話(代表) (06) 6943-7111

日本経済新聞電子版 <http://www.nikkei.com/>

NIKKEI MJサイト <http://www.nikkei.co.jp/mj/>

MJメールマガジン <http://www.nikkei4946.com/e-service/>

購読の申し込み先 ☎ 0120-21-4946

<http://www.nikkei4946.com>

買い手と交歓 ヒントの源泉

照明・雑貨 デザイナーが「直販」

「セルフプロダクション」という言葉を最近よく耳にする。企業に属さないデザイナーが自ら作ったものを直接買い手に販売することで、照明やインテリア雑貨といったプロダクト分野ではあまり見掛けない光景だった。東京都内では若手の作り手が集って、自分たちのデザインやモブ作りを来場者に熱く語るイベントが頻繁に開かれている。

「そうやって作るんだ」「へー、すごい」——。6月18日、東京・千駄ヶ谷のギャラリー&ショップ「プロット」で「SPRING CARAVAN 2011」というイベントが開かれた。5組のデザイナーが商品を持ち寄り、来場者に解説しながら販売する、いわば野菜の産地直売的な催しだ。

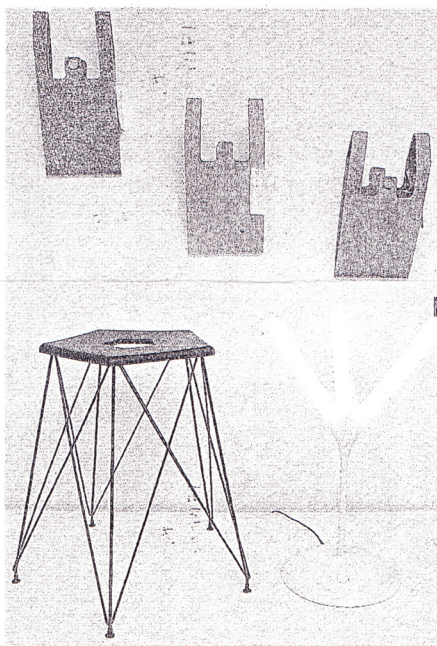
来場した20〜30代の男女は会場に用意された飲み物を口にしながら、制作風景を眺めたり、デザイナーたちからモノ作りの工程やデザインの意図などを聞いたり。感心して思わず声を上げる人がいれば、気に入ったものを衝動買いする人も。会社員の神永友美さん(37)と司馬香里さん(27)は「作っている人から話が聞けるとその商品への興味が湧いてくる」と熱心に説明に耳を傾けていた。

このイベントは5月から3カ月間、第3土曜日だけ行うもので、「印(イン)デザイン」「マイクロワークス」「501(ゴーマルイチ)デザインスタジオ」の3組が主宰。毎回2組の作り手をゲストに呼ぶ趣向だ。主宰する3組が「CARAVAN」という名前で展示販売の活動を始めたのは昨秋から。様々なイベントで顔を合わせるうち、モノ作りのスタンスが似ていることで意気投合した。

印デザインはパソコン周辺機器メーカーを辞めた石井保幸さん(33)が専門学校の同級生だった池内昭仁さん(33)と2003年に結成したデザインユニット。考案したデザインを工場に持ち込んでどこでも相手にしてくれなかったことから、自分たちで作り始めた。

発光ダイオード(LED)の淡い光を灯す3本足の照明や、五角形の座面に極限まで細く軽したスチールの脚を付けたイス。どこかアートの一面をのぞかせるとともに、こうした工業製品を工房で作っていることに驚かされる。

一方、マイクロワークスは海山俊亮さん(29)が03年から手掛けるオリジナルプロダクトのレーベルだ。学校を卒業後、「自分のアイデアを純度の高いまま形にした



「モノ作り」考えも伝える

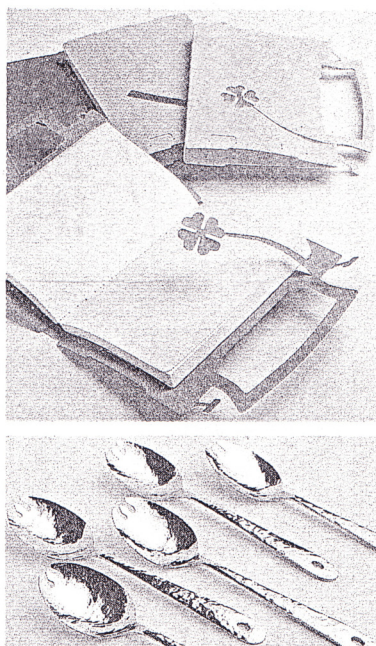
い」と何の知識やノウハウもないままネットなどを使って工場を探し、できた商品を直接店に持ち込んで販路を開拓してきた。

閉じるとバッグに早変わりするポリプロピレン製のしおり付きブックカバーに、穴が音符の形になった塩コショウ入れなど、現在9点を商品化。日々の暮らしを楽しむデザインが目につく。

そんな軽妙さと対極をいくのが4年前から501として活動する竹中壮一さん(34)と五十嵐広威さん(34)の2人組。美大で修得した工芸技術の鍛金で、倉庫に眠る古びけたステンレスのスプーンやフォークをまるで銀食器のような輝きを放つ一品によみがえらせる。クラフト寄りではあるものの、廃れようとするものに目も向ける視点と今の時代性にマッチするデザインセンスが光っている。

「邪魔されず、独自性を」

3組ともセルフプロダクションといっても三者三様。ただ「誰にも邪魔されることなく独自性を追求したい」というモノ作りへのかたくなさは共通する。また、じかに買い手と接し「リアルな声を聞



ナーたちのプロトタイプ(試作品)を販売する店。「様々な理由で世に出なかったものを見せる店があってもいい」(松村敬店長)と昨年11月に誕生した。モノ作りの裏側を知らしめるという点ではセルフプロダクションと相通じる。

■景気低迷、工場も柔軟に

ではなぜ、こうした動きが台頭してきたのだろう。量産を前提にしたプロダクトの場合、生産では金型を作るための資金が必要となる。ファッションと違って個人ではハードルの高い分野だった。だが、景気低迷や生産拠点の海外移転で工場側も小ロットで対応し始め、ネットを使えば簡単に販売もできる。企業への就職も厳しく、請負の量や単価も下がっている。「ならばセルフで」という流れは考えられる。

その一方で「作り手が買い手と対話したがついて」とはプロダクトデザイナーの酒井俊彦さん(47)。短期間に新製品が低価格で販売され、安く早くが当たり前になっている中、「モノ作りには手間や労力がかかる“常識”を現場はきちんと伝えたいと感じている」。そんな酒井さんも9月に自ら企画製造する「サンプルプロジェクト」を立ち上げ、買い手に今思うことを発信していくという。

(ライター 佐藤俊郎)

会場となったプロットはデザイ

